

氏 名	近 藤 史
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 60 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 ア フ リ カ 地 域 研 究 専 攻
学 位 論 文 題 目	タンザニア南部高地における在来農業の創造的展開と互助労働システム ——谷地耕作と造林焼畑をめぐって——

論文調査委員	(主 査)	伊 谷 樹 一	教 授 掛 谷 誠	教 授 荒 木 茂
	准教授	池 野 旬		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、タンザニア南部の農耕民ベナが、社会・経済の動向に巧みに対応しながら、在来の知識や技術を基盤とした新たな農法を創出してきたことに着目している。そして、その農耕体系を農学的に解析するとともに、創出過程における生態・経済・社会・文化の相互関係を総合的に分析して、アフリカ農業における集約化の可能性と、農村の持続可能な発展の可能性について考察している。

第1章では、先行研究に照らしながら論文の背景と目的を示している。第2章では、調査地の概要を解説しつつ、新たな農法が成立する背景について、当該地域の生態環境とタンザニア独立後の政策変遷との関係に焦点をあて詳述している。この地域では、起伏に富んだ地形と冷涼で湿潤な気候条件のもと、古くから草地休閒型の自給的な農業が営まれてきたが、1974年には集村化政策によって集落は幹線道路沿いに集められ、また1980～85年には幹線道路の舗装、さらに1980年代後半には経済の自由化によって、当地での生活は徐々に市場経済との結びつきを深めていった。その過程で、ベナは在来農業に外部の技術やモノを取り入れながら新しい農耕システムを創出していった。

第3章と第4章では新たに創出された農法に焦点をあて、その形成プロセスを、社会経済の変容を踏まえながら、おもに農業生態学と土壌肥科学の観点から解析している。人口増加にともなう耕地不足を受けて、谷地では従来の排水技術を改良し、また化学肥料を積極的に投入しながら、豊富な水に由来するさまざまな栽培上の問題を克服することができる連作農法をつくりあげ、谷地を隅々まで利用していった。この農法は、経済状況の変化に対応しながら普及し、耕地不足の問題を軽減しつつ食料自給と現金収入の確保を可能にした。

第4章では、斜面地に見られる持続可能な焼畑システムの形成プロセスについて論じている。流通が活性化する過程で主食生産に化学肥料を投入し、自給用のトウモロコシ生産の維持にも現金が必要になり、その後の肥料価格の高騰によって農法のさらなる改変が迫られていった。人びとは、植民地期に導入された生長の速い外来樹モリシマアカシアの林に、マツ林の育林や在来の焼畑の技術を適用することで、人工林を循環的に利用する「造林焼畑」のシステムをつくりあげた。

第5章では、在来性を基盤とした創造的な農業の展開が同一地域で積み重ねられてきたことに着目し、そのプロセスの再生産機構について検討している。ベナ社会にはムゴーウェと呼ばれる在来の互助労働システムがあったが、それは集村化政策、住居の密集、現金経済の浸透、さらには出稼ぎや離農にともなう男性労働力の減少などの社会的な状況が変化するなかで構造や規模を変えていった。本章では、社会変容のなかで再編、拡大されたムゴーウェが世帯間の労働力の差異を是正するとともに、新たな試みを実施し、その経験を蓄積・継承する母体として機能していることを指摘した。

第6章では、以上の議論を総合して、ベナ農業の創造的な展開を内発的な発展と位置づけて考察している。ベナは、集村化、幹線道路の舗装、経済自由化などの変化に応じて、集約的な湿地耕作を発達させ、また斜面地では人工林を用いた持続可能な焼畑システムを創出するなど、彼らを取り巻く社会的、経済的な変化に巧みに適応しながら在来農業に改良を加えて

きた。こうした展開には、経済的なインセンティブに牽引されつつ、内部と外部の技術的な諸要素が融合する側面と、新たなイノベーションが地域に浸透するために社会組織が再編される側面とがあった。そして、こうした社会組織が、より多くの世帯を巻き込みながら外部要素を取り込む体制を兼ね備えることで、試行錯誤のプロセスと成功の経験が社会全体で共有され、在来性にもとづく創造的な展開が再生産されてきたと論じている。

論文審査の結果の要旨

アフリカの多くの在来農業には、頻繁に農地を移して生態環境を広く薄く利用しようとする「粗放」な傾向が認められるが、人口の増加や、経済の自由化などによって流通が活性化するにつれて土地への定着性が高まり、とくに集落近郊の環境劣化が大きな問題になりつつある。また、アフリカの「伝統的」な農村では、食糧や富の平準化機構が働き、厳しい生態・社会環境のもとでサブシステンスを確保するとともに、他方で新たなイノベーションの展開を阻む要因として作用することが指摘されている。アフリカ農村における環境保全と経済の向上を目指すうえで、人びとの環境観や、平準化機構として機能することもある共存の原理を踏まえ、地域の発展を模索することは、アフリカ地域研究の重要な課題である。

タンザニア南部高地に居住する農耕民ベナは、近年の市場経済化の動向に対応しながら、在来の知識や技術に外来の諸要素を巧みに取り入れることで新たな農耕システムを創出し、生態環境の循環的な利用と経済の向上を両立させてきた。本論文では、この住民の主体的な農業改良を内発的展開の事例と捉え、その過程における生態・経済・社会・文化の相互関係を総合的に分析することで、彼らがいかにして自らの環境観や価値観に根ざし、社会、経済的な変動に適応しうる自立的な農耕体系をつくりあげてきたのかを明らかにしている。

本論文は、以下の学術的な貢献によって高く評価できる。まず特筆すべき大きな貢献は、在来農業のポテンシャルと柔軟性をもつ創造性を示したことである。ベナは、起伏に富んだ地形と冷涼で湿潤な気候条件を利用して古くから谷地耕作を維持してきたが、人口増加にともなう耕地不足や流通制度の変化を受けとめ、在来の農法に近代的な技術を積極的に取り入れながら、谷地を隔々まで利用できる連作農法を創りだしていった。従来の排水技術を改良し、また化学肥料を積極的に投入して、豊富な水に由来する様々な栽培上の問題を克服することで、食料自給と現金収入の両立を可能にしたのである。それは、農業生態学的な解析を基盤としつつ、農法の創出過程を社会や経済の歴史的な変遷を踏まえながら学際的に分析し、在来農業の動態の重要な一側面を明らかにした研究の成果である。

またベナは、植民地期に導入された生長の速い外来樹モリシマアカシアの林に、マツの育林技術や在来の焼畑の技術を適用することで、人工林を循環的に利用する焼畑システムをつくりあげた。申請者は、これを「造林焼畑」と呼び、その形成プロセスを詳細に記述するとともに、作付け体系を農業生態学と土壤肥科学の観点から解析し、その持続可能性を示した。このシステムの普及が地域社会に経済的な効果をもたらすと同時に、燃料材の採取や耕地拡大にともなう天然林への負荷を軽減して環境保全の役割をはたすことも示し、今後のアフリカ農業を展望するうえできわめて重要な指針を提示している。

さらに本論文は、アフリカ農村における内発的な発展の可能性を示す研究の成果として高く評価することができる。ベナ社会のムゴーウェという互助労働システムは、出稼ぎや離農によって生じた世帯間の労働力の差異を平準化するとともに、新たな試みを実施する母体として機能している。多くのメンバーで構成されるムゴーウェを通して、農業技術の改良に関する試行錯誤のプロセスや成功の経験は地域社会全体で共有、蓄積され、またそれが新たな試みの源泉となって、創造的な展開が再生産される。当該地域にみられる様々な農法の創出は、こうした社会的基盤のなかから生まれてきたことが明らかにされた。それは、内部と外部の技術的、社会的な諸要素が融合し、新たな社会編成やイノベーションが創出され、相互に関係しつつ積み重ねられていくプロセスを綿密に分析した独創的な研究の成果である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものとして認める。また、平成20年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。